

【準備問題 1】（下書き用紙なし）

この問題については、解答の数値を詳細に解説することはありません。

仕訳帳の仕訳を確実に押さえていただき、それを 1 つ 1 つ総勘定元帳に転記する一連のプロセスを確認しておいてください。

費目別計算・・・当月に発生した材料費・労務費・経費の金額を把握します。

（準備問題 1、仕訳①、②、③）

製品別計算・・・どの製品を作るのにいくらかかったかがわかる原価を仕掛品勘定に、どの製品を作るのにいくらかかったかがわからない原価を製造間接費勘定に振り替えます。（準備問題 1、仕訳④、⑤、⑥）

（この問題の仕訳は、便宜上 No ごとに仕掛品、製品の金額を分けて仕訳していますが、1 つにまとめていただいても構いません。）

【準備問題 2】（下書き用紙なし）

この問題についても、解答の数値を詳細に解説することはありません。

準備問題 1 の原価計算表（10 ページ）をもとに 12 ページの製造原価報告書を作成していること、原価計算表および準備問題の仕訳⑧、⑨の内容をもとに損益計算書を作成している点を確認しておいてください。

現実的には、問題文を読み、原価計算表と製造原価報告書、損益計算書の作成が 15 分程度でできれば十分ですが、総勘定元帳にある勘定の流れを通じて、「勘定連絡図」をしっかりと把握しておく、今後の学習に役立ちます。

細かい数値の求め方がわからない場合は、簿記講座 Q&A 事務局宛にメールでご質問ください。

【準備問題 3】（下書き用紙あり）

114 回工業簿記の類題です。資料の読み取りが問われています。

問 1 材料勘定の作成が求められています。

まずは、15 ページの資料 2 を見ながら、材料勘定を下書き用紙に作成します。（最初に借方を完成させるようにしてください。）

300 個部分が材料勘定の月初在高の金額、7 月 4 日、11 日、18 日、25 日にそれぞれ仕入れた部分の金額合計が当月仕入高の金額となります。

貸方部分（材料消費数量の把握）

問題文に、「製品 1 個につき 1 個の材料が使用され、材料は第 1 工程の始点で投入される。その後の追加投入はない。」とあります。

資料 1 を見て、6 月に製造を着手した製品については、6 月の段階ですでに材料の投入は終わっているのでカウントしない、7 月に製造を着手した製品について、材料勘定から仕掛品勘定への振替が行われる、と読み取らなければなりません。（下書き用紙参照）

貸借差額で、期末材料の数量を求めます。
その上で、期末材料の金額を「先入先出法」を前提に計算してください。
完成品の金額については、貸借差額で求めます。

問2 ロット別個別原価計算を前提とする仕掛品勘定の記入が求められています。

月初仕掛品・・・資料3の金額の合計です。

当月投入分

直接材料費・・・問1で求めた材料消費高の金額が、そのまま材料勘定から仕掛品勘定に振り替えられます。

直接労務費・製造間接費・・・直接作業時間1時間あたりの予定配賦率が問題文に与えられていますので、1時間あたりの予定配賦率に「当月直接作業時間合計」を掛けて金額を求めます。

「当月直接作業時間合計」は、資料1の各工程の作業時間の合計です。
(下書き用紙参照)

直接経費(外注加工費)・・・※が付いている製品が、外注に出した分です。
資料1の※の数量合計に1個あたりの外注加工賃を掛けて求めます。

月末仕掛品・・・資料1より、7月末現在で未完成の製品がどれかを把握します。
(X—60、X—70、X—80)

X—60、X—70、X—80の数量、作業時間をもとに、これらを作るのにかかっている原価を計算します。

直接材料費・・・問1で作成した材料勘定をもとに、月末仕掛品の直接材料費の金額を求めます。月末仕掛品の数量が全部で650個です。ロット別個別原価計算を採用し・材料の払い出し計算が先入先出法を用いていることから、

「先に払い出された材料が先に完成して製品となる。後から払い出された材料が仕掛品として残っている」と判断します。(下書き用紙参照)

直接労務費・製造間接費・・・直接作業時間1時間あたりの予定配賦率が問題文に与えられていますので、1時間あたりの予定配賦率に「月末仕掛品X—60、X—70、X—80に対してかかった直接作業時間合計」を掛けて金額を求めます。

(下書き用紙参照)

直接経費(外注加工費)・・・※が付いている製品が、外注に出した分です。
X—60の数量に1個あたりの外注加工賃を掛けて求めます。

製品原価は、貸借差額で求めるようにしてください。